

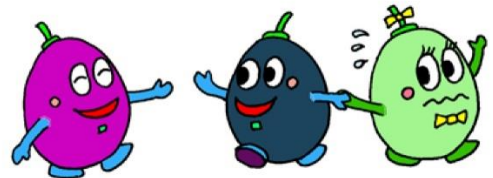
魔法の言葉 さしすせそ！

2学期、グレープクラブ（学童クラブ）から、学校に「一輪車、竹馬などの遊具を設置させてほしい」という申し入れがあり、二つ返事で受け入れました。遊具を使って子どもたちが元気に遊ぶ様子を見に行くと、一輪車で遊んでいた1年生が「校長先生乗れる？」と聞いてきました。「昔、練習して乗れたんよ。」と小さな一輪車を貸してもらって跨りますが、フェンスをつかんでも漕ぐことすらできません。かつて「乗れた」とはいえ「行先は一輪車に聞いて～！」というレベルだったのでしかたありません。「乗り方忘れたあ。」と不出来をごまかしていると「繰り返し続けたらいいよ。練習するのすごいね。」と励ましの言葉をかけられました。いい大人が気恥ずかしいのですが、アドバイスする子の表情は真剣。（それ以来、時々一輪車に跨っています。でも、やはり乗れない...。）

遊びだけでなく「もっとできるようになりたい」と願う子どもたちの姿はいたるところで目にします。「50mを速く走りたい」「なわとびを上手くとびたい」など運動のめあて、「漢字テストで100点」「大きな声ではっきり音読」といった学習のめあて、「家の仕事を手伝う」「班長として責任をもつ」などの生活のめあて等、今よりさらに一歩進んだ自分、高みをめざす自分を実現しようとする姿です。前向きな子どもたちを目にしたとき、私たちはどんな言葉かけをしているのでしょうか。

そうした場面では「さすが」「じょうず」「すばらしい」「せい長したなあ」「その通り」などの肯定的な言葉をよく口にするのではないのでしょうか。一輪車に跨る自分にかけてられた「すごい」という言葉も真っ先に思いつく言葉です。私が昨年拝聴した講演会で、講師（岡山で創業されたある企業経営者）から、「魔法の言葉 さしすせそ」の効果についてのお話を伺いました。「さしすせそ」の言葉では、

- 相手にやさしくなる
- 努力、継続が大切という価値観を育まれる
- 受容されることで信頼関係が深まる
- 自信が深まり、積極性が増す



といった効果を生み出すことが知られているという内容でした。

大人でもそうですから、子どもたちにあてはめれば言わずもがなの効き目になることでしょう。ただ「テストが100点」「マラソンで1位」といった結果だけにこだわって評価すると、大人でも子どもでも「より高い自分をめざそうとする」姿勢にはつながらないことも強調されました。目標に届かなかったとき、結果だけを評価された人は「失敗した自分はダメである」と強く意識してしまうからです。

「マラソン、13周走ったよ。」「そりゃすごい。がんばってるねえ。」「家の手伝いで洗濯ものをたたみます。」「せい長したなあ。家の人もみんな喜ぶよ。」「先生、どうしたら習字がうまくなりますか？」「さすが！やる気がうれしいねえ。」最近、学校で実際に子どもたちと交わした会話です。話の後で子どもたちがさらにやる気をみなぎらせてがんばる姿に、ちょっとしたやり取りが子どもたちとの間で好循環を生み出すことを実感しました。「魔法の言葉 偉大なり！」

子どもたちの姿をじっくりと見ているといろいろな発見があります。そこから、前向きな気持ちを汲み取って支えていくことができる大人でありたいと思います。
(校長 石井 聡)